

ある日の講演会、「建築屋とは」

(2001)

只今、ご紹介頂きました・・・でございます。本日は特に、「建築設備」に関わる皆様方のお集まりだという事で、おそらくは、普段、皆様方が御不満を抱いておられる、「建築屋」の内幕について、少しばかりお話を致したいと思います。

皆様方が御不満を抱いていらっしゃるのも尤もな話で、日本の「建築屋」程、訳の分からない呼び名は、先進国の何処に行っても有りません。設計士、構造屋、申請屋、設備屋、施工屋、そして建築のお役人：現実には既に完全に分業化されているのに、まとめて一応「建築屋」なのです。

まず、私自身の事に付いてお話致しますと、自分は唯「絵」が好きだった・・・と言う理由だけで建築屋の道を目指したのですが、学校での授業：力学や構造計算や法律やらが嫌でしうがなかったのですが何とか卒業し、今から三十数年前に宇部興産に「建築屋」として入社致しました、皆様も良くご存知の、中安閑一翁の一番お元気な頃で、中安さんはもうその頃から「土建」大好き社長でした、工場の拡大は勿論の事、空港・ホテル・病院・ゴルフ場・テレビ局、そして最後には120億の宇部興産ビル（宇部全日空ホテル）：と、次々に建設：別の言い方をすれば、次々と借金を重ねて参りました。そうした背景もあって、三十数年間、自分は他の「建築屋」さんでは経験できないような大きなプロジェクト

クトをやらせてもらったなと振り返っています。さて入社早々、「構造計算」をしました…学校で、嫌々勉強しましたが、実際に建てる建築の構造計算を生まれて始めてしたのです、悪い事に、この計算書で建築確認申請まで通ってしまいました、余り大きな声では言えませんが、阿知須ゴルフ場の、今でも有りますキャディーさんの寮です、倒れずに今でも立派に建っています。余談になりますが、地震にも倒れない建築の構造設計は誰にでも出来るのです…問題は、法律に定めている以上の地震力が働いた時、スナリ倒れるような、ギリギリの経済設計が出来ているかどうかのポイントなのです。この一件以来、私は構造計算は一切していません…何が言いたいかというと、私自身はデザイナーのつもりなのですが、日本ではそんな分類はしません。構造屋も、デザイナーも、施工屋もいっしょくたです。そんな中で「設備屋さん」だけが十数年前になります「建築設備士」という資格が登場したわけです、何故か専門家扱いを受けています。…実はこれが本当なのです。建築屋も早く、建築構造士、建築申請士、建築デザイナー…と分けられなければなりません、欧米では建築の世界だけ取ってみても、アーキテクトとエンジニアは全く別物です。（又余談になりますが、私も若い頃、プラント建設のスーパーバイザー（建築指導員）でトルコに2年間派遣されましたが、私の資格は、「シビルエンジニア」…言うなれば「土建屋」とでも言いましょうか？ トルコのエンジニアの前では「俺はアーキテクトだ・

アーキテクトだ…」と言いつりました。

何故こんなに建築の資格が曖昧な事になってしまったのか？ 最大

の原因は、「一級建築士」制度です。一級建築士になるためには、六つの違う勉強をマスターしなければなりません、①計画・②建築法規・③構造・④施工・⑤建築の歴史・⑥建築設備、…そしてこれらの学科の試験に合格して、最後は設計・デザイン…これは学問ではないのです…「感性」なのです、いくら勉強しても駄目な人は駄目なのです。ちょっとひどい事を言いましたけど本当なのです。毎年6万人が受験し6千人が合格しています…いかにも難しいようなのに、不思議な事に、日本には、

この「一級建築士」が30万人位いるのです。（余談ですが「司法書士」は毎年700人が合格し、総数で今、二万人程度です。）私の見る所、

30万人の内、本当の？建築士（私が言うところの建築デザイナー）の数はというと、ざっと見るところ、山口県で約20人…全国では、50の県が有りますから1000人…東京・大阪等の都会の事を考慮して…

まあ合計…3000人がいい所でしょうか？一級建築士の100人に1人…これくらいしかデザイナーはいないのです。それなのに不思議

な事に日本中に、毎年20数兆円の建設投資…（これはパチンコ産業と全く同じ規模です）この内、約10兆円程度の建物が建築されているのです、…今後、皆さんが建物を見る時は、おおざっぱに見て100軒に一軒が「建築」だと思って頂ければいいと思います。100軒の住宅の

内99軒は、建築では有りません。最近は特に、プレハブ住宅が充実し始め、こちら西日本では「・・・ハウス」の家ばかり・・・住宅も段々と「車」や「時計」並・・・工業製品化してきています・・・建築屋が要らなくなりました。

ここで一つ、一番分かり易い、悪い例をお話しましょう、定年間際のおじさんです、技術系・・・特に電気屋さん・機械屋さんに多いようです、そしてどちらかといえば「会社内」で、余りぱっとしない・どちらかと言うと「くすぶっている」人、小金も溜まり、さて自分の家を建てようと決断しました、この「プロジェクト」だけは会社の上司や人事考課には全く影響無く、自分の好きな通りに出来ます。おじさんはまず住宅雑誌を流し読みし、ランダムにいい所取りし、そしておもむろに「10ミリ方眼紙」を取り出します、技術屋さんですから、方眼用紙を見ただけで目が爛々と輝き出します、そして自分の理想とする「間取り」をあれこれ考えるのです。技術屋さんですから様々なバリエーションも出来ます、ぴかっと光るような創意工夫も出来ます。10ミリを91センチに換算すれば坪数もすぐ出ます・・・私に言わせれば、この10ミリが1^{トイ}ルで無く、91センチ・・・縮尺で言うところ110分の1の図面だということろが最大のガンなのです・・・頭の中では100分の1の大きさの物を、110分の一で描いているのです。だから殆どの家は、方眼紙1cmの狭いトイレ・狭い廊下、急な階段・・・99%の家がそうです。

そして、この図面と言われるグラフ用紙に基づいて、工務店を呼びつけその建築屋さんらしい人が建築確認申請をし、施工が始まり「立派な建築」が出来あがるのです。更に悪い事に、言わなくてもいいのに、「この家は俺が設計したのだ」と自慢タラタラに言うのです、更に言わなくてもいいのに、「この床柱はどういう材料で…、この設備はこういう仕掛けが…」要するにコンセプトが無いじゃないですか、結局、建築の大事なところを考えてないのです、…建築ではない、建築は必要ない…と言われればそれまでですが、やはり建築設計士の持っているノウハウ、「空間」を構成するノウハウ、雰囲気作り…を利用したほうが永い目で見れば余程得策だと思います。それともう一つ、設計士はおだてれば、あくまでも施主の味方になってくれますから、工務店を本気で値切ってくれます。工務店に設計施工で頼んで「いくら負けてもらった」とか「俺はいくら値切った…」とかいう理屈に合わない自慢話はもう止めましょう。先ほど工業製品のお話をしましたが、住宅はまだまだ注文製品です…特注製品の割には、まだまだ設計料は安く、特注の家だからといって建設費が特別高くなるわけでもありません。そうならば、画一的な家に拘らず、もっと自分の生活スタイルに合った家を特注したらどうでしょう。建ってから15〜20年経過し、子供が独立した家を見てみると哀れなものです、2階に作った2部屋の子供部屋は今や物入れです、老夫婦で有効に使えばいいのに、階段が急で2階に上がる気にもなりません、

玄関脇に作った狭い「応接間」…これも物入れです、そして殆どの時間を狭苦しい居間・食堂・台所で生活しているのです

子供の成長と、段々と年をとって行く自分たちの行く末を考えた、長いライフスタイルの建築設計…少し難しい話になりますが、「時間」の要素を取り入れた設計が、…特に住宅を設計する場合、必要になってきました。建築の専門的な用語で言うと「成長する家」…（これはどこかのプレファブメーカーのキャッチフレーズにありましたね）、「新陳代謝する家」。このように変化して行く家を作るのも建築家の仕事です。もう一つの方法として、「無目的の家」（逆説的には「多目的にもなる家」）です。…実は私の家がそうなのです、何に使うかわからない「洋間」を4部屋と、一応和室を一つ作りました…要するにある程度の広さの空間を作っておきさえすれば、どのような使い方にも、結構耐えてくれるものです、かえってフレキシビリティがあります。



恬然^{てんぜん}の我が一日のどろろ飯

足るを知る慎^{つつ}ましき日の木の芽和え